

ガラテヤ書1章11-24節 「人に拠らない福音」

1A 人間によらない啓示 11-12

2A 迫害者への啓示 13-17

1B 狂信者 13-14

2B 恵みによる召し 15-17

2A 使徒たちとの接触 18-24

1B 個人的知見のみの関係 18-21

2B ユダヤの諸教会にとってのパウロ 22-24

本文

ガラテヤ人への手紙1章 11 節からです。パウロは今、偽りの福音、福音と呼ぶことのできない教えに、ガラテヤにいる兄弟たちが引きこまれてしまったところを、どのようにして引き戻すか悩みに悩んで、この手紙を書いています。パウロが、主イエス・キリストの福音、すなわち、私たちの罪のために死なれて、葬られて、三日目に甦るという福音をガラテヤ地方の諸教会に伝えて、多くの異邦人が救われました。ところが、間もなくしてエルサレムから来たとされる教師たちが来て、「あなたはイエスを信じるだけでは救われない。モーセの律法を守り、割礼を受けないといけない。」と言いました。そして、ガラテヤ人の信者たちはそれらの律法や慣習を行ない始めたのです。それで、パウロはその教えが偽りであり、呪われるべきものであることをこの手紙で教えています。そして、パウロは挨拶の言葉を終えて、本題に入ります。

1A 人間によらない啓示 11-12

11 兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。

パウロが伝える主題は、「自分の伝えている福音が、人間に拠るものではない」ということです。神から直接、与えられたものであること。主イエス・キリストご自身に拠って与えられている啓示であることをパウロは、自分が使徒として福音を宣べ伝えるまでに至った経緯を話すことによって弁明しています。

パウロが今、直面しているのは、彼の使徒としての権威が引き落とされていることです。エルサレムから来た教師たちとするユダヤ主義者らは、自分たちに彼らを引き寄せるために、パウロを引き落とすことをしていました。「彼は、十二使徒たちから福音を聞いて、信じたが、それは最近のことだ。そして彼はまだ未熟な者であるのに、このようにあなたがたに伝えてきたのだ。イエス・キリストを信じるだけで救われるというのは、まだ幼く、足りないのだ。私たちが教えるように、やっていかないと本当には救われないのだ。」というような言い方をしていました。それでパウロは、しっ

かりと事実を明らかにして、彼の伝えている福音が、神とイエス・キリストご自身から直接、来ているのだということを教えているのです。

この宣言は、私たちキリスト者にとって極めて重要なものです。なぜなら、私たちが信じている福音の拠り所がどこにあるのか？ということであります。実際に、こんな議論があります。「イエスという人物は歴史上存在していた。けれども、イエスが復活したのだらうということを弟子たちが後で作り上げ、パウロがキリスト教という形でまとめあげた。」というものです。つまり、私たちの信じている事柄が、人間によって始まったというものです。いいえ、神ご自身から来たものです。ゆえにパウロは、自分であろうが、天使であろうが、誰であろうと異なる福音を伝えるのであれば、その者は呪われるべきであると宣言したのです。だからこそ、私たちは命をかけて、パウロの伝えている福音を信じています。彼の書いた手紙、また他の使徒たちが手紙を一字一句信じて、それにすがっています。もし、これが人からであれば、他の単なる人間の作った宗教と何ら変わりなく、その献身は空しいものになってしまいます。

聖書には、確かに預言者の語っていることは、神から来ているのだということを証しています。旧約時代は、モーセが主の律法を伝えました。それは彼が自分勝手に作り出したものではなく、シナイ山に上って与えられたものなどがあります。明らかに主が語られたということが、記されています。イエスご自身が、いつもユダヤ人指導者から、彼の権威がどこから来ているのかを試されました。けれども主は、ご自分が神から語っていることを示すために、悪霊を追い出し、病人を直し、旧約聖書に確かにメシヤが行なうと言われたことを行われ、三日目に確かに甦られ、この方が神の御子ご自身であることを明らかにされました。そして今、使徒たちがおり、またパウロ自身がいまいます。彼らが確かに神の啓示を受けて、それで語っているのです。

12 私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

パウロは、他の十二弟子と違って、三日目に甦られ、彼らに現れた時にそこに居合わせていませんでした。ですから偽教師たちは、「パウロは、彼らから教えを受けたのだ。」と言いふらしていたのです。しかし、パウロはそうではありませんでした。彼には、また別の機会に、復活されたイエスが直接、パウロに出会ってくださったのです。使徒 9 章を開いてください。「1 さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、2 ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。3 ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。4 彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。5 彼が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。6 立ち上がって、町にはいりなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずです。」7 同行していた

人たちは、声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えずに立っていた。8 サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いて、ダマスコへ連れて行った。9 彼は三日の間、目が見えず、また飲み食いもしなかった。」このように、人間からではなく、ただイエス・キリストご自身が彼に現れてくださったのです。それでパウロは、福音を宣べ伝える使徒として、主ご自身に出会ったことを 15 章 1-8 節、特に 8 節で話しています。「1 コリント 15:8 そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。」

そして、人間から「教えられもしませんでした」とも言っています。ユダヤ人たちには、先祖からの伝承がありました。律法を守るために、その守るための枠組みを教えていく口伝律法がありました。例えば、安息日で「仕事をしてはならない」というものは具体的に、何をすることであるかということで、教師たちが教えていたものがあり、それが新約時代にはユダヤ人の間で「ミシュナ」と呼ばれていました。ですから、例えば床を担いで歩くことは働くことだとされていたので、イエス様が安息日に足なえた者を起き上がらせ、床を担いで歩かせたら彼らは、怒ったのです。パウロは、このような形で、福音を学んだのではありません。人から人へ伝えられたもの、そうした伝承によって今行なっていることを行なっているのではありません。キリスト教会にも、必ずしも聖書に書かれていないことをそれが生活の規範として教えては、同じ過ちを犯すこととなります。聖書こそが、私たちの生活と信仰の規範であります。

そして、「ただイエス・キリストの啓示」と言っていますが、「啓示」というのは元々の意味は「覆いが取り除かれる」という意味です。これまで隠されていたものが明らかにされる、露わにされるということです。パウロは律法に精通し、律法に熱心な者でありましたが、彼の目にはキリストの栄光が隠されていました。ところが、復活の主イエスご自身が会ってくださり、彼はこの方こそが律法と預言者の成就であることが明らかにされたのです。パウロは、福音を論じている時に何度も、先祖たちが神の約束として待ち望んでいたものが、成就したのだと訴えていました(使徒 13:23 等)。

今のキリスト者は、使徒たちのように直接に、主イエス・キリストの啓示が与えられることはありません。例えば、世界のムスリムの人たちで、夢や幻でイエス様に出会って信仰に至るということはありませんが、それでも、その現れてくださったイエス様の言葉を改めて書き記して、それが聖書になることはありません。その人個人に語られたものであり、パウロのように神の真理として、全ての人々が信じ、規範にするものではありません。私たちは必ず、聖書、使徒たちの啓示を誰かから聞いて、それを受け入れて信じます。

しかしながら、それでも私たちは、一人一人が主との直接の出会いをすることによって初めて、キリスト者となっています。「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。(ヨハネ 1:12-13)」ですから、「誰かから、こう言われてそれで信じました。」という言葉や、「誰かに信じなさいと言われて、それで信じ

ました。」というようなものは、証しとは呼びません。「私が、イエス様を信じました。この方を自分の救い主として受け入れました。」と自分自身が神を信じたという決断の体験を持っていないと、いけないのです。

2A 迫害者への啓示 13-17

1B 狂信者 13-14

13 以前ユダヤ教徒であったころの私の行動は、あなたがたがすでに聞いているところです。私は激しく神の教会を迫害し、これを滅ぼそうとしました。

パウロはここで、ユダヤ主義者に対して反論をしています。一つは、彼は神の教会の迫害者であったということ。パウロが使徒たちから教えを受けたとするユダヤ主義者に対して、そんなことはとんでもないことで、エルサレムやユダヤの教会の者たちは、パウロについて非常に恐れていて、彼に近づかない、また彼から逃げているという事実です。

ところで、なぜ宗教に熱心な者がこのような迫害者になるのでしょうか？ イエス様は弟子たちに、こう言われました。「ヨハネ 16:2-3 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来ます。彼らがこういうことを行なうのは、父をもわたしをも知らないからです。」父なる神と、イエス様を知らないからということがあげられます。そしてパウロは、「ローマ 10:2-3 私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。」神についての知識がないこと、それは神が義なる方であり、自分自身の義ではないということを知らないということです。自分の義を立てようとするから、自分が神の肩代わりになっているのだと誤ってしまい、それで迫害者となっていきます。そしてもう一つ、実は良心が痛んでいるからです。「使徒 26:14 私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があって、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。』」彼は、ステパノの証言が自分の心に突き刺さっていることを知っていました。しかし、それに逆らっていたので迫害へと駆り立てられていたのです。

このようにパウロは教会を迫害しましたが、なぜユダヤ主義者らの言葉は説得力があるかと言いますと、神の恵みを信じられないからです。これだけ迫害していた者が、どうしてその教えを宣べ伝える者となるのか？ その変化が起こる訳がないと思うのです。それで、イエス・キリストの福音以外に、何かを付け足さないとそのようにはならないと考えるのです。しかし違います。神の恵みの福音のみが、人を変えるのです。

14 また私は、自分と同族で同年輩の多くの者たちに比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖からの伝承に人一倍熱心でした。

もう一つのユダヤ主義者に対する反論は、彼は律法について教わらなければいけないような人ではなく、ユダヤ教については同族で同年輩の人たちよりもはるかに優れていて、律法を守ることにしても人一倍熱心だったということです。彼は、エルサレムにおいてガマリエルという、当時、高名な学者の下で律法を学びました(使徒 22:3)。そして彼はパリサイ派でありましたが、当時、その宗派がユダヤ教の中で最も律法に厳格でありました。ですから、偽教師たちが律法をふりかざして、それを守らなければいけないと言っていたところが、もしそんなことを言うならパウロこそが、その道を突き進んでいました。しかし、その同じ人物が、イエス・キリストの福音のみによって救われると唱えていたのです。

なぜなのか？ 第一に、パウロは律法を知っていたからこそ、キリストが律法の成就であることを悟れることができました。第二に、律法が聖なるもの、霊的なものであることを知っていたからこそ、律法によっては生きることができないことを悟ることができました。律法に対しては自分は死んでいることを悟れたのです。

2B 恵みによる召し 15-17

15 けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださった方が、16a 異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき、

ここで、がらっと言葉が変わります。「けれども」という言葉から始まり、そして神が、彼に恵みを施してくださった、神がなされたという、美しい神の働きを語っています。13-14 節は彼がどれだけのことをしたのかを語っていましたが、ここでは神ご自身がパウロにしてくださったことを話しています。

パウロは、「生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださった」と言っています。「生まれたときから」というのは、母の胎内にいるときから、というのが直訳です。彼は、自分がイエス・キリストの知識に至る前から、母の胎内にいるときから、神がこの働きのために自分を召してくださったのだ、ということが分かりました。ローマ 9 章には、ヤコブが選ばれて、エサウが退かれたことが書かれていますが、その選びが行なわれたのは、善悪を行なっていない母の胎内にいるときからである、とあります。自分が召し出されたことが、自分が何かを行なったからという何か原因を探し出すがまったくできません。パウロは、そのときから選び分けられ、生まれてからの自分もすべて神によって導かれ、そして信仰に至ったことを知っていました。同じように、私たちの人生にも神が関わってくださいます。私たちが何かを行なったからという人生ではなく、神がこのように行なってくださったという恵みの足跡を見ることができます。これが恵みの福音であります。

具体的に、パウロは異邦人への福音宣教者として、生まれた時の環境がありました。一つに、彼はギリキヤ地方のタルソ出身でした。タルソは、非常にギリシヤ文化の濃厚な町でした。そこにユダヤ人の過程から生まれたのですが、彼は異邦人の言葉であるギリシヤ語とその文化に精通し

ていました。彼は救われた後から、すぐに全くギリシヤ語に不自由なく使えて、福音を語ることができ、また彼らの思考を理解できたので、効果的に伝えることができました。そして彼は、これまで話したようにユダヤ人として、また厳格なユダヤ教徒として生きました。ですから、律法についてよく知っており、それゆえキリストを知り、また律法の行ないではなく、信仰による義を知ることができました。それから彼は、生まれながらのローマ市民であることが使徒の働きを読むと分かります。ローマにおいて市民権は特権でした。しかしパウロは生まれながらのローマ市民だったのです。パウロは、宣教旅行において迫害を受けましたが、それでもローマ市民として法的な守りがあり、それで難を逃れたことがあります。彼がその市民権を持っていなかったら、あれだけの広域の宣教活動はできなかつたでしょう。したがって、パウロは、生まれた時から異邦人に福音宣教をするために、神に選び分けられていたのです。

私たちも同じように、自分たちが何をしたということではなく、神が自分の生活や人生に前もって働きかけておられて、それで今の自分、そしてこれからの自分にしてくださいという、恵みの業をしておられます。主はそれぞれのところで召しておられるところで、ご自身に仕えてほしいと願われています。そこから主の恵みの働きは始まります。パウロは、「異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされた」と言いました。御子が自分の内で啓示されたのですが、それはそのまま異邦人への宣教へとつながりました。自分自身の内におられる御子がかっきりしていればそれだけ、主に与えられた使命を果たすことができます。自分が何をするか？ではなく、自分がキリストにあってどうであるか、という位置あるいは関係が大切です。

16b 私はすぐに、人には相談せず、17 先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。

パウロは続けて、自分が人から教えられ、人から受けて、福音を宣べ伝えているのではないことを弁明しています。「人には相談せず」と言っていますが、これは直訳では「血肉に相談せず」であります。自分の受けた啓示について、それを人間的なものに相談するのではなく、主の御霊が導かれるままに動いていったのです。パウロはイエス様に出会った後に、目が見えなくなり、ダマスコにいるアナニヤによって水のバプテスマを受け、それから聖霊のバプテスマも受けましたが、それは別に相談した訳ではなく、アナニヤが主に言われたことをただ行なったただけでした。そして大事なものは、「先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず」ということです。これが、ユダヤ主義者らが、パウロが使徒たちから聞いたのだと言っていたので、とても重要な事実となります。

そして、「アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。」と言っています。彼がダマスコの後に、アラビヤ地方にいったと書いてあるのはここガラテヤ書だけです。ダマスコはシリアにあります。当時はそのすぐそばまで、ナバタイ王国が広がっていました。コリント第二 11 章の終わりのところで、こうあります。「2コリント 11:32-33 ダマスコではアレタ王の代官が、私を捕えようとしてダマスコの町を監視しました。そのとき私は、城壁の窓からかごでつり降ろされ、彼の手をのがれま

した。」アレタ王とは、ナバタイ王国のアレタス四世のことです。その代官がダマスコにいたようで、パウロがダマスコの会堂で福音を伝えていたところ、捕えようとしていたので、彼は逃げました。そして、彼は南に下がって、ナバタイ王国のあるアラビヤ地方のどこかにいました。ペトラが首都だったので、そこに行ったかもしれません。いずれにしても、彼はそこで主ご自身から教えを受けていたかもしれません。

私たちキリスト者も、どれだけ主から教えを受けているのかによって、その人の霊的な成長が決まります。ある人は、人から確かに教えを受けているのですが、いつまでもその人を通して主ご自身から教えを受けていません。

2A 使徒たちとの接触 18-24

1B 個人的知見のみの関係 18-21

そしてようやく、パウロはエルサレムの使徒たちとの接触があったことを書きます。

18 それから三年後に、私はケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間滞在しました。19 しかし、主の兄弟ヤコブは別として、ほかの使徒にはだれにも会いませんでした。20 私があなたがたに書いていることには、神の御前で申しますが、偽りはありません。21 それから、私はシリアおよびキリキヤの地方に行きました。

「三年後」とありますが、ヘブル的な年数の数え方は、その年に少しでも引っかかっていたら、一年と数えます。なので一年ちょっとという可能性もあります。それだけの後でエルサレムに行っています。使徒の働きですと、すぐにエルサレムに行ったかのように書かれていますが、そんなことはありません。ここで、ケパすなわちペテロにだけ会っています。さらに、主の兄弟ヤコブと言っていますが、ヤコブの手紙を書いたヤコブ、使徒の働き 15 章に出てくるエルサレムの教会の指導者のヤコブにも会っています。おそらくペテロの住まいで十五日間だけ滞在していたのでしょう。それだけで、互いに知り合いになって、福音を信じていることを確認しただけでしょう。大事なのは、「ほかの使徒にはだれにも会いませんでした。」ということです。使徒たちに会ってはいないというところが、彼の受けた啓示、その福音は人間からではなく、神からのものであることを教えています。

そして、「シリアおよびキリキヤの地方に行きました。」とあります。シリアと言え、アンティオケがあるところ。そしてキリキヤは彼の故郷タルソがあるところ。パウロはタルソに戻り、そしてバルナバが、アンティオケで教会が建て上げられたので、パウロを探して、アンティオケで彼が教えることができるようにしました。

2B ユダヤの諸教会にとってのパウロ 22-24

22 しかし、キリストにあるユダヤの諸教会には顔を知られていませんでした。23 けれども、「以前私たちが迫害した者が、そのとき滅ぼそうとした信仰を今は宣べ伝えている。」と聞いてだけは

いたので、24 彼らは私のことで神をあがめていました。

他の使徒たちには会っておらず、ユダヤの教会は素通りしていたので、パウロは顔を知られていなかったのです。ただ、彼らの中でパウロの語っている福音が、自分たちと同じ福音であるという前提がありました。「以前私たちが迫害した者が、そのとき滅ぼそうとした信仰を今は宣べ伝えている。」と言っています。そして彼らは神をあがめています。つまり、そこにある神の恵みを彼らは知ったからです。これがユダヤ主義者らの反応とは正反対です。神の恵みを知っている者たちは、自分の知らぬその知らせについて、妬みや無関心になることはできず、神の恵みに感動して、神をほめたたえるはずで

こうやってパウロは、自分が人から教えられて福音を語っているのではないことを注意深く書いています。人からではなく、神からのものであるというのは、厳密には使徒たちだけのものです。けれども、確かに聖霊によって自分はキリストから教えられているのだという確信はあるのでしょうか？使徒ヨハネは、こう言いました。「1ヨハネ 2:27 あなたがたのばあいは、キリストから受けた注ぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません。彼の油がすべてのことについてあなたがたを教えるように、..その教えは真理であって偽りではありません。..また、その油があなたがたに教えたとおりに、あなたがたはキリストのうちにとどまるのです。」これがあるかどうかで、自分が恵みの福音に立っているかどうかも分かることでしょう。